

実習報告（異校種実習）

## 学習者の自覚の把握と自覚を育む授業研究

峰 翔次郎（授業実践探究コース）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

小学校学習指導要領改訂に伴い、「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善が求められている。授業改善の具体的な内容については、学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びが実現できているかという視点をもつことが示されている（文部科学省 2018:77）。また、小学校学習指導要領解説国語編には、どのような資質・能力を育成するかを指導事項に示し、どのような言語活動を通して資質・能力を育成するのかを言語活動例に示すという関係を明確にする（文部科学省 2018:10）。更に、主体的な学びの実現のためには学習活動を振り返って資質・能力を自覚したり、共有したりすることの重要性が述べられている（文部科学省 2016 : 50）。

教師が単元に沿った資質・能力を指導事項として学習課題に取り入れて学習者に示し、更に学習者が指導事項について理解し、育成された資質・能力について振り返ったり共有したりすることが重要だと言えるだろう。しかし、依然として教材への依存度が高いとの指摘もあり、更なる授業改善が求められる状況にある（文部科学省 2018 : 6）。

このことから、探究実習を通して、学習課題を用いた資質・能力の育成に取り組み、振り返りを用いて育成された資質・能力を学習者が自覚することのできる授業研究を行う。

資質・能力の育成については指導事項に準拠した育成すべき資質・能力、そのための思考操作、言語活動の3フレーズによる学習課題を設定した実践を行い、折に触れて毎時間語ることに取り組む。

自覚については、振り返りの時間を用いる。しかし、自由記述にすると何を記述するかが分からない場合やどのように学びを自覚したのかが見えにくい場合もある。そこで手立てとして育成された資質・能力が見取れる具体的な記述例を全体でモデリングし、その考え方を共有したり何がどう優れているのかを説明したりするようなコーチングを繰り返す。このような取り組みを継続して行い、振り返りは自覚する力を育むことにおいて効果があるのか検証を行う。

以上より、2年間の研究の目的を、学習者の自覚を育む国語科授業をデザインすることとし、学習者が国語科において育まれた資質・能力を自覚することができることを目的とする。

### 【探究実習の研究目標】

- 実習校の生徒の実態を把握する。
- 国語科学習における資質・能力の育成について知る。
- 実習校における生徒の自覚の実態把握をする。
- 資質・能力の育成を図り、学習者自身が資質・能力を自覚できる実践を行う。

### 【探究実習の概要】

実習期間は2021年9月6日～2020年12月7日で6日からの連日10日間と10月に入ってから隔週火曜日での10日間の全20日間行った。配属学級は3年3組と3年4組である。実習内容は主に授業

参観，実践授業である。実践授業は，全 6 時間の合計 12 時間行った。教科は国語科で実践内容は単元「万葉・古今・新古今」である。

### 【探究実習の成果と課題】

成果として，育成すべき指導事項である「和歌を読むことを通してその世界に親しむ」ことに関してアンケートを実施した。結果は 3, 4 組共に学級の約 50%, 70%がそう思うと回答している。「毎時間単元の学習課題を意識していましたか」のアンケート項目ではどちらも約 50%がとても思うと回答している。また，生徒の振り返りにおいて「和歌の表現にふれたり，現代語に直すときの細かいニュアンスなどで表現力が身につきました。」、「今回の学習で私は言葉から情景を連想する力がついたように思います。」といった記述もあり，和歌に親しむことについての学習課題の語りは指導事項を意識する上で効果があったと考えられる。振り返りに関しては，学級によって具体的な例を挙げながら記述したり，抽象的な文章だけになっていたり個人差はあるものの学習を通して育成された資質・能力，今後の学びの方向性について振り返ることができていた。振り返りは自覚する力を育む，見取る有効な方法となり得たと言える。更に，振り返りの記述や授業観察を踏まえ，現時点での自覚の定義を「育成された資質・能力」と「各時間の学びの振り返り」が記述されていることを定義とする。

一方で課題も見られた。学習課題の語りは，アンケートやインタビュー結果から学習が進むにつれて資質・能力への意識も薄れることが明らかとなった。毎時間ではなく，何のために学習を行っているかを振り返る際に語りを取り入れる方がより効果的だったと考える。また，自覚に関しては振り返りの時間以外にも検証するソースが必要だと考える。実習期間では，振り返りの時間以外にアンケートや抽出者のインタビューを用いて確かめるだけに終わった。振り返りでは記述できないけれども育成すべき資質・能力を自覚できている生徒への評価等に関しては振り返りの記述，アンケート，インタビューはもちろん，授業での作成物，テスト成績，日常生活等，様々なデータをもとに多面的な視点から自覚できたかの判断を行う必要がある。また，自覚には学習者自身の自覚する力を育むことも必要であり，資質・能力と同様に自覚する力にも焦点を当てる必要性を感じた。

以上を踏まえると，資質・能力を育成する学習課題の設定，振り返りの授業デザインに学習者の自覚する力を育むことを可能とする理論を組み合わせることによって育成すべき資質・能力を学習者自身がその都度理解し，強化していく過程が重要になってくる。そこで資質・能力を育成する授業実践に加え，学習者の自覚する力を育むために Merrill,M.D.(2002)が提唱する ID 第一原理と Schraw & Moshman(1995)の理論を足場にしながら学習者の自覚を育む授業デザインの開発を進めていきたい。

### 【引用参考文献】

- ・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』平成 29 年 7 月。
- ・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』平成 29 年 7 月。
- ・文部科学省（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校に学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- ・グレゴリー・M・フランコム（2016）「課題中心型インストラクションの原理」C.M.ライゲルース A.A.カー＝シェルマン『インストラクショナルデザインの理論とモデル 共通知識基盤の構築に向けて』（訳・鈴木克明 林雄介），北大路書房，pp.62-86.
- ・Schraw,G. and Moshman,D.（1995）Metacognitive Theories Educational Psychology Review, Vol. 7, No. 4, 1995, pp.351-371.